

男と女 中村正義（豊橋市美術博物館蔵）

昭和35年、異例の若さで日展審査員の椅子についた正義であったが、翌年には、我妻碧宇や森綠翠らと共に師であった中村岳陵に反逆し、日展を脱退する。古い体質をもつ組織の呪縛（じゅばく）から逃れた彼は、初期日展時代とは全く別人のような積極的な活動を展開し、実験的でポップな作品を発表した。

昭和38年、第7回日本国際美術展に出品された《男と女》は、その転換期の代表作といえる。男女の絡み合う姿を単純化したコミカルなフォルムで構成し、太い黒のアウトラインと螢光塗料にボンドを混合した奇抜な色彩を用いて、装飾的でダイナミックな作品に仕上げている。

正義は、この年開催された男女の人間像を主題にした個展（上野松坂屋）を前にして、次のようなコメントを残している。「グッドデザインがどうしても合わないような絵。そんな絵が画室に大分たまつた。見まわせば、嫌な色とえげつない、おとつあんとおっかさん、ダンボールの洋服を着たようなおじさんも登場する。暗いところでも見える作品を中心とした展覧会にしたいと考えている。」つまり、これら作品群の制作意図は、表面的な技巧や美しさを主張するのではなく、従来の〈日本画〉という概念をはみ出した素材や表現を採用し、既成画壇の批判にその主眼が置かれた。豊橋市美術博物館では収蔵品の核として中村正義の代表作を集めている。

（学芸員 大野俊治）

目 次

- 平成6年度自然科学部門研修会報告..... 2
- 平成6年度美術部門研修会報告..... 3
- 新規加盟館紹介..... 5

平成 6 年度

自然科学部門研修会報告

平成 7 年 2 月 8 日(水)名古屋市東山植物園・植物会館研修室において、愛知県博物館協会自然科学部門研修会が開催されました。参加者は自然史系博物館だけでなく、歴史民俗系博物館や、さらに愛知県教育委員会の後援を得て、学校関係からの参加もあり、30名となりました。

《内容・講師》 13:00~16:30

(1)「伊藤圭介翁 一人とその資料について—」

講師 東山植物園 横山 進氏

東山植物園伊藤圭介記念室に所蔵される文書の目録

1 医学 2 本草・博物・園芸 3 植物学
4 考古 5 博物会 6 産物誌 7 地誌・
紀行 8 詩歌・書画・隨筆 9 絵画・地
図 10 曆・番付 11 その他 12 日記・公
私文書等

以上の他、腊葉標本、化石、貝、鉱物標
本等の資料が収蔵されている。

(2)「東山植物園における資料整理について」

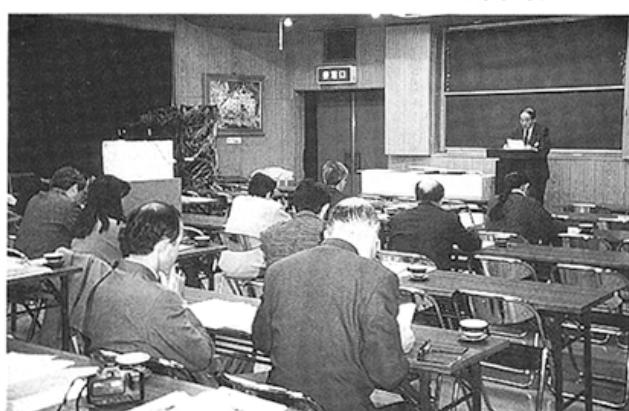
講師 東山植物園 岡島 徳岳氏

(3)資料見学及び施設見学

「自然科学部門研修会を受講して」

豊橋市自然史博物館 学芸員 須山 知香

今回の自然科学部門の研修会では、東山総合公園内の植物会館に収蔵されている、尾張の本草学者伊藤圭介の残した数多くの記録について、寄贈、収蔵された経緯、そして資料の解説、収蔵目録の発行などの整理についてご説明いただきました。当時長崎に滞在していたオランダの蘭学者シーボ



ルトとも交流し、日本の近代的な植物学の基礎を築いた、我国の本草学における重要な人物の一人である伊藤圭介の業績について、地元の小学校での胸像設立時のエピソードなども交えながらの楽しい研修会となりました。

また、植物会館の収蔵資料とその整理方法、収蔵庫、種子保存用冷蔵庫などの施設見学、そして植物園と温室の見学をさせていただきました。

高校時代に知多半島南部での食虫植物の分布を調べていた際、伊藤圭介の記したナガバノイシモチソウのスケッチのコピーを手にいれました。この植物は東海地方を特徴付ける植物のひとつで、葉にある毛の先から粘液を出して小さな虫を捕らえます。江戸時代に書かれたこの資料にはナガバノイシモチソウが尾張の地に生育することが、明確なスケッチと共に述べられていました。ナガバノイシモチソウの命名者はスウェーデンの植物学者リンネですが、これは日本国内でのナガバノイシモチソウの初記載であると思います。

伊藤圭介が発見した植物はいくつかあります。植物会館の展示室には伊藤圭介が残した数多くの記録文や、伊藤圭介にちなんだ植物の解説などがあります。

今回の研修会は、本草学のみならず、医者として流行病の手当心得書を出版し、諸国が飢饉に陥った時には「救荒食物便覧」を刊行するなど、江戸末期から明治にかけて活躍した日本の誇るべき植物学者の、生涯に通じた業績を学ぶ大変良い機会でした。先人の残した資料がこのように保管、整理され、後世に伝えられることが、これから自然科学の発展を支える土台となることと思われます。

平成6年度

美術部門研修会報告

時折吹く風は冷たく頬を刺すが、日差しはメリキリ春。会場となった昭和美術館の渡りを歩いていると「あれは万作かねえ？」とMさん。よく見ると、閑静な庭に小原の山では見たこともない少し大きめで風変わりな万作らしき花が咲いていた。2月も終わりに近づいた24日(金)、落着いたたたずまいのなかで55名の参加者を得て美術部門研修会が開催された。今回は4つのテーマが用意されていたが、部門に捕らわれることのない充実した内容であり参加者全員が満足して帰路についたと思う。



I 「表装具変遷と取り扱い」

講師：大矢啓詞氏（表具師 大矢萬栄堂）

講師の大矢氏は、若いころアノ岡墨光堂で修業され、犬山にある国宝の茶室“如庵”的修復にも携わられた方である。少ない時間の関係で軸装についての話が中心であったが、その経験を踏まえての話には自信と信頼感が伝わってきた。まず表具の変遷、ついで軸装の基本的な形態を实物を見ながら説明され、仕立ての工程をビデオで見、紙などについての説明にも及んだ。博物館関係者にとって重要なことは、どの表具師に仕事を依頼するかであろう。もちろん今回の講師大矢氏に依頼すれば間違いないとは思うが、様々な制約で不可能なこともあると思う。そこで、選定の一つの目安となるのが“糊”“紙”

“時間”について尋ねることである。糊であるが、表具には甕に仕込んで何年も寝かせたフノリを使用する。表具師は何年に仕込んだものを記録して大切に保管しているそうだ。紙は、肌裏（本紙に直接施す裏打）に本美濃紙（国指定重要無形文化財：本美濃紙保存会員の漉いた

紙）、裏打に吉野の美栖（ミス）紙・宇陀紙（それぞれ文化財保存技術に選定されている技術者の漉いた紙）を使用しているかと、どの紙漉き職人の紙かを尋ねると良い。表具師は、自分の使っている紙を漉いた職人の名前を知っているはずである。できれば紙も見せてもらう。時間は、依頼して1年以上かけて仕上げることである。つまり裏打して板貼りした段階で四季を経験させてやるのである。そうすることによりタワミ難い表具になる。修復には、対象となる資料と同時代で同質の材料が必要である。以上の目安は一般的なことなので、すべてにあてはまるものではない。要するに表具師の人となりをよく知り、どんな仕事をしたか見極めることである。

II 「琳派の絵画」

講師：中部義隆氏（大和文華館学芸員）

日本美術史の変遷を辿るなかで、琳派は装飾藝術を極めた重要な位置にある。狩野派や土佐派などが血脉により継承されたのに対し、琳派は約100年毎の非血脉により継承されたという話から始まり、俵屋宗達を中心とした琳派の特徴である画面構成、デザインなどを、最新の研究成果に基づきスライドを交えながら講演された。個人的には、宗達の料紙装飾のあたりが非常に興味深かった。また、宗達が商売上成功し名を上げたのに対し、尾形光琳は、財産を食い潰したおかげで芸術性を高め世に残ることになったという話は、同じ成功者でも対象的である。「人間万事塞翁が馬」ということであろうか。酒井抱一は、さまざまな画風を学んだ後光琳に魅かれ琳派に傾倒するが、より自分らしさを打ち出すための苦労がうかがわれる。

現在活躍中の作家の中には、琳派の影響を受けている者も少なくない。それゆえに今回琳派について学んだことは有意義であった。



III 「博物館・美術館における温湿度計の知識と取り扱い」

講師：㈱いすゞ製作所

講師の方は、わざわざ東京からお越しいただいた。ありがたいことである。ともあれ、まず自社製品のPRと説明がされた。その後、温湿度の計測について教えていただいた。そこでの注意事項を挙げてみよう。

- ①温湿度計は、展示ケースなどの目立たない隅に置かれることが多いが、隅は空気が渾み易いので正確な測定ができない。展示資料に近いところの方がより正確に測定できる。
- ②自記式温湿度計など測定機の温湿度感知部のホコリを日々取り除く。
- ③自記式温湿度計の記録紙は、円筒の下に合わせて取付ける。
- ④アスマン通風乾湿計と自記式温湿度計を併用し計測する。
- ⑤自記式温湿度計のアスマン通風乾湿計との誤差を調整する。
- ⑥自記式温湿度計の記録用カートリッジペンの取替えは自分で行う。

より正確な温湿度管理を求めるならば、④を実践することである。今のところ、アスマン通風乾湿計が最も正確に測定できるようだ。ちなみに1/2と1/5の目盛がある。また自記式ではないので各々記録する必要がある。

計器には、検定モノとそうでないものがある。同じ製品だが、気象庁の検定モノというだけで2万円程高くなっている。

IV 「アーマシールド（ガラスの強化膜）について」

講師：綜合警備保証(株)

こちらの講師も東京からである。さて、アーマシールドはイギリスで開発された対テロ、防犯用ガラス強化膜で、厚さ約0.3mmのポリエチレン製である。ビデオによると、マッタクもって驚くほどの効果である。棒で叩いてもなかなか割れない。手榴弾を爆発させてもガラスの飛散や落下がかなり防止され、アーマシールドが貼ってある面は手で触ることができる。ガラスの飛散や落下をかなり防止できる点から、地震対策としても有効である。施行は、ガラスの両面に施すのが最も望ましいが、人に対する面に施すとキズが付きやすいので、内側におこな

うことが一般的である。内側にすることにより、万一ガラスが割れても資料を損傷する危険が極めて少なくなる。気になる費用は、施工条件や面積により異なるが、工賃を含め1m²当たり1万数千円と少々高い。

このテーマは、防犯面から見た効果について設定されたようだが、先の阪神大震災により甚大な被害のあった関西地区から、逸翁美術館の方が地震対策としての効果を知りたいと遠路参加されていた。大阪へ帰られて、その効果が多くの方に伝われば有難いことである。

阪神地区の博物館においては、我々の想像を絶する被害のようで、一日も早く復旧を祈るばかりである。博物館に勤める者の使命として、あらゆる被害を想定した対策を手近にできることから実施しなければならないことは今更言うまでもない。



昭和58年に第1回美術部門研修会が桑山美術館で開催されたときのテーマは、表装について。紫屋の水羊羹を戴きながらのこぢんまりとした研修だったことを覚えている。あれから早12年が過ぎたが、少しも進歩していない自分が情けなく思えてきた。反省しきりである。一つ思い出したが、12年前に教えて戴いた「裱具の栄：山本元著（芸艸堂刊）」はなかなか役立つので参考までに。

最後に、研修の会場提供を始め一切をお世話戴いた昭和美術館を始め関係者の皆様、研修にご協力戴いた講師の皆様に感謝申し上げ、平成6年度愛知県博物館協会美術部門研修会の報告とする。

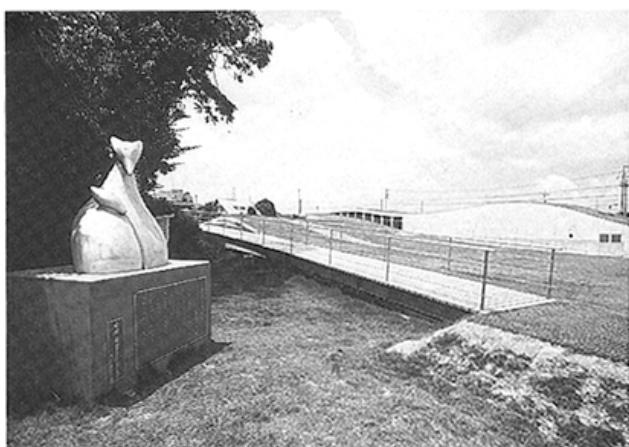
(文責 和紙展示館 学芸員 富樫 朗)

新規加盟館紹介

平成6年度に当協会へ加盟されました館の概要を、ここに紹介します。

新美南吉記念館

所在地	〒475 半田市岩滑西町1-10-1 TEL (0569)26-4888
交通	名鉄河和線半田口駅より徒歩15分 知多半島道路半田・常滑インターから3分。駐車場74台（無料）
沿革	29才で夭折した郷土の児童文学者、新美南吉を紹介するため、昭和52年、岩滑コミュニティーセンター内に南吉資料室が開設されました。その後、昭和63年に、新美南吉生誕80周年、市制55周年を記念した記念館建設構想を半田市が発表。平成3年に記念館の設計コンペが行われ、翌年着工、平成6年6月5日に開館しました。
施設	敷地15,065m ² 鉄筋コンクリート造、地下2階、地上1階 収蔵庫1 69m ² 収蔵庫2 30m ² 展示室1 363m ² 展示室2 178m ² 図書閲覧室 189m ² 工作室 47m ² 会議室 66m ² 研究室 18m ² × 2 応接室 19m ²



事務・学芸員室 190m²
開館 10:00~17:30
休館 毎週月曜日・第二火曜日（前記の日が祝日と重なった場合は開館し、翌日休館）
入場料 高校生以上200円（団体20名以上は160円）
特色 童話「ごん狐」の作者として知られる半田市出身の児童文学者、新美南吉に関する資料、約750件を収蔵。展示室では、南吉の生涯と作品、文学活動の様子を、日記、童話集、自筆原稿などの資料の展示の他、ジオラマ、視聴覚教材など使って紹介しています。図書閲覧室には、絵本、児童書から、南吉や児童文学に関する文献資料、郷土資料まで、幅広い書籍が集められています。また、屋外の童話の森には散策路が巡り、せせらぎが流れ、南吉童話の舞台となった里山の自然に触れることができます。



高浜市やきものの里かわら美術館

所在地	〒444-13 高浜市青木町九丁目6-18
電話	(0566)52-3366
FAX	(0566)52-8100
交通	電車 名鉄三河線「高浜港駅」下車、徒歩10分 車 国道419号線 衣浦大橋東交差点角（駐車場あり）

沿革 高浜市は、古くから三州瓦を生産するやきもののまちです。現在では、全国の瓦生産の約50パーセントを占めています。

以前は、まちのいたるところで瓦や鬼瓦を造る様子を見ることができましたが、今では、瓦の生産も機械化され、そ



の様子を見かけることも少なくなりました。

こうした中で、市の特産である瓦を素材とした新たなるまちづくりを展開する「やきものの里基本構想」が平成2年3月に策定されました。構想では、やきものの里「高浜」を象徴するシンボルとして、また、瓦文化の伝承と新たな高浜の文化を創造する場として「高浜市やきものの里かわら美術館」の建設が、位置付けられました。

平成4年9月に美術館の建設に着手し、平成6年3月に竣工しました。現在は、美術館の環境整備期間とし、今年10月7日に開館します。

施設 敷地面積 2,802.93m²

建築面積 1,681.04m²

延床面積 4,669.48m²

構造 鉄筋コンクリート造

規模 地上4階地下1階

展示室—1 229.65m²

展示室—2 235.62m²

収蔵庫 144.23m²

その他 ホール、スタジオ、ハイビジョンシアター、ハイビジョンデーターブース、レストラン、資料室、陶芸創作室、講義室・会議室など

開館 展示室 9:00~17:00

(入館は16:30まで)

休館 毎週月曜日（ただし、この日が祝日、振替休日にあたる場合は、その翌日）

12月28日～1月4日

特色 「かわら」をメインテーマとする当館

では、瓦を美術的に鑑賞するだけではなく、瓦に関連した優れた美術作品をも展示し、瓦の持つ魅力を紹介していきます。

また、幅広い芸術文化を通して人々の美意識と感受性を触発し、創造の意欲を高め、ゆとりと遊び心の中に生活のうるおいと豊かさをもたらすような、個性的な美術館活動を開催していきます。

なお、市民が参加・体験できる美術館を目指し、土に触れ、瓦ややきものに親める場として陶芸創作室を設け、造形体験を中心としたワークショップを開催していきます。



「愛知の博物館」No.61

発行日 平成7年3月31日

編集・発行 愛知県博物館協会

〒489 愛知県瀬戸市南山口町234番地

愛知県陶磁資料館内

TEL <0561> 84-7474

FAX <0561> 84-4932